

全柔連発第23-0497号  
2023年12月8日

公益財団法人全日本柔道連盟 加盟団体 各位

公益財団法人全日本柔道連盟  
審判委員会委員長 大迫 明伸  
〔公印省略〕

国内における「少年大会特別規程」における  
「逆背負投（通称）」並びに「両袖を持って施す投げ技」による罰則の取り扱いについて

拝啓 師走の候、時下ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

平素は本連盟の諸事業に対し格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、過去の少年の大会等におきまして、「逆背負投（通称）」により投げられた選手が後頭部を強打して脳震盪を起こすケース、あるいは「両袖を持って施す投げ技」により投げられた選手が顔面及び頭頂部から落下し頸椎損傷あるいは脳振盪等を起こすケースが報告され、発育発達段階の観点から全柔連審判委員会では少年大会特別規程を改正し、少年の大会（中学生以下）においては「逆背負投（通称）」並びに「両袖を持って施す投げ技」を禁止とし、施した場合には重大な違反として「反則負け」の扱いとしてきました。

この少年大会特別規程の改正により、近時の少年大会では、「逆背負投（通称）」及び「両袖を持って施す投げ技」が使用されることはほとんど無くなりました。

その反面、通常の背負投を仕掛けたが受の選手が反対側に投げ落とされる、あるいはお互いが片袖を絞った状態で技を仕掛けることで、不十分な見極めにより、前者を「逆背負投（通称）」、後者を「両袖を持って施す投げ技」を施したとして裁定され、本来試合続行が許される選手が「反則負け」となるケースが見受けられます。

この様な裁定により、不利益を被るのは多感な少年期の選手であることから、少年健全育成の観点からも「逆背負投（通称）」並びに「両袖を持って施す投げ技」による罰則の取り扱いを重大な違反「反則負け」から軽微な違反「指導」に変更することとします。

本連盟主催大会では、**2024年4月1日**より施行します。

今後、本連盟審判委員会では、引き続き審判講習会等で「逆背負投（通称）」並びに「両袖を持って施す投げ技」を施すことの危険性を注意喚起して参ります。

なお国際柔道連盟試合審判規程では、「逆背負投（通称）」を施すことは「指導」であり、「両袖を持って施す投げ技」を施すことはノーペナルティとなっております。

関係各団体におかれましては、以上の趣旨をご理解戴き、各団体関係者及び選手への啓発・ご周知をお願い申し上げます。

【問い合わせ先】公益財団法人全日本柔道連盟 大会事業課 大塚・渡辺・関口・城地

電話 03-3818-4392 メール [shinpan@judo.or.jp](mailto:shinpan@judo.or.jp)

## 変更点(2022-2024)

### 技の連続性

技を掛けてから相手の背中が着くまでに、一連の動作が途切れていなければスコアになり、途中で一旦技が止まった場合は、そこから押し倒して背中を着けてもノースコアとなる。

### 「技あり」の判定

肩と背中が畳に着き、肩と背中を結ぶラインが畳のラインから90度か、それ以上背中側に傾いていれば、下の腕が背中側に出ていたとしてもスコア。90度よりも腹側に傾いていればノースコアとなる。

### 両手や両肘で着地した場合の判定

大内刈などで後ろに倒された際に、両肘や両手を後ろ手に着いて背中が着くのを阻止しようとした場合、相手の技に「技あり」が与えられ、後ろ手に着いた側には「指導」が与えられる。

### 「めくり」技はノースコア

相手の払腰や内股を潰し、相手の釣り手方向にめくり返す隅落は、ノースコアとなる。

### 逆背負投(いわゆる韓国背負)の禁止

ノースコアかつ「指導」

### 投げ技の最終局面で相手の帯より下を掴む行為

例えば払巻込や外巻込などで巻き込んでいて、最後に相手を裏返す局面で相手の脚に手が触れるのはスコアとして認められ、巻き込みの途中で一旦動作が止まった場合、それ以降は相手の帯より下を掴む行為は寝技として認められる。

### 標準的ではない組み方について

相手の帯を掴む、片襟、クロスグリップ、ピストルグリップ、ポケットグリップなどの「標準的ではない組み手」は、攻撃の準備として用いられる場合には反則とならない。

### 組み手を切る行為について

組み手を切った後、すぐに相手を掴みに行かない場合は「指導」の対象となる。

### 柔道衣や髪を直す行為

1試合の中で、乱れた髪を直すのは1回のみ認められ、2回目以降は「指導」を与える。

柔道衣の乱れに関しては、1回目は無言、2回目からは「指導」を与える。

### ヘッド・ダイビングについて

内股などを掛けた側が頭から畳に突っ込む行為(ヘッド・ダイビング)は、これまでも「反則負け」の対象でしたが、今後はこの反則をさらに厳格に取る。

## 全日本柔道連盟主催大会における柔道衣コントロールの運用について

2023年7月24日

全日本柔道連盟審判委員会・大会事業委員会

本連盟主催大会における柔道衣コントロールについては、以下の通り実施する。

規程に満たない場合、試合する権利がなくなり、試合がまだ始まっていなかった場合には「不戦勝ち」または、試合がすでに始まっていた場合には「棄権勝ち」が相手に与えられる。

- 1 IDカードとゼッケン、柔道衣の色(紐)、帯の色が合っているかを確認。  
※帯は黒帯のみ(無段者の白帯を除く)とする。
- 2 「柔道衣の氏名等の表示」に適合しているか、指定の広告・ゼッケンが正しく縫い付けられているか、破れ・血痕がないか、おおむね乾燥し不快なおいがないかを確認。
- 3 認証ラベルの確認。

**上衣・下穿き** 「IJF ロゴ(赤)」又は「JU0000・JUB000の赤文字ラベル」のみ使用可。

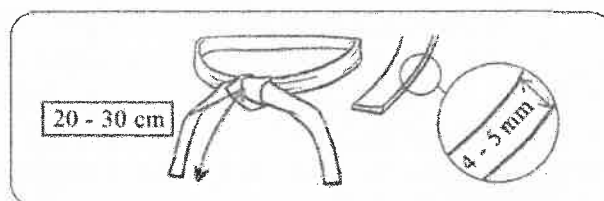
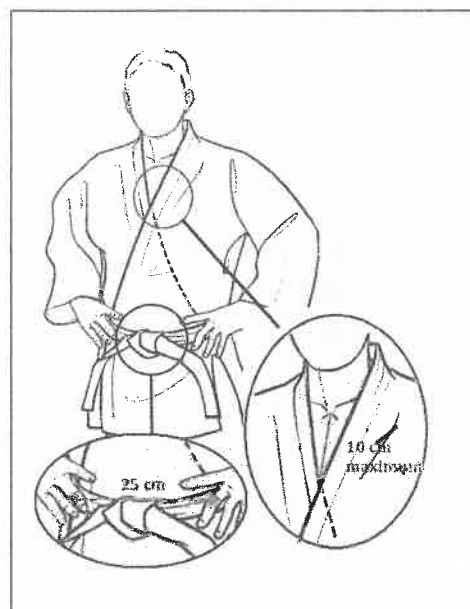
**帯** 「IJF ロゴ(赤・青)」又は「JU0000の赤・黒のラベル」が使用可。

※認証ラベルの剥がれた柔道衣の着用は認めない。

※原則として、上衣・下穿きのメーカーは同一であること。

- 4 上衣の大きさ・帯の長さを確認。

- ① 測定器を用いて、胸骨の上部頂点から襟の交差部までの垂直直線距離が10cm以下であることを確認。
- ② 帯が腰骨の位置で正しくきつく締められた状態であることを確認。その後、測定器を用いて、上衣を前で重ねた際に2つの下襟の距離が水平に25cm以上であることを確認。
- ③ 測定器を用いて、帯が中央の結び目から端まで20~30cmに収まっているかを確認。
- ④ 袖の長さが腕を真っ直ぐに伸ばして掌で三角形を作った状態で、手首の骨(尺骨の頭)を含めて腕全体が覆われているかを確認。覆われていない場合は、自分自身で柔道衣を伸ばし、一度だけ再測定ができる。
- ⑤ 腕を真っ直ぐに伸ばして掌で三角形を作った状態で、測定器全体がスムーズに袖の中に滑り入るかを確認。



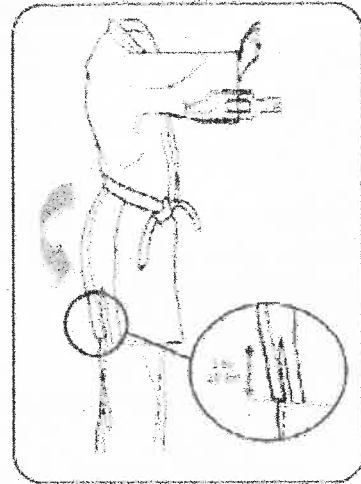
- ⑥ 上衣の前後が同等の長さでお尻を完璧に覆っており、各階級の規程に合っているかを目視にて確認。

男女 73 kg級以下 (-48・-52・-57・-63・-70・-60・-66・-73 kg)

背中から 20 cm以上であることを確認。

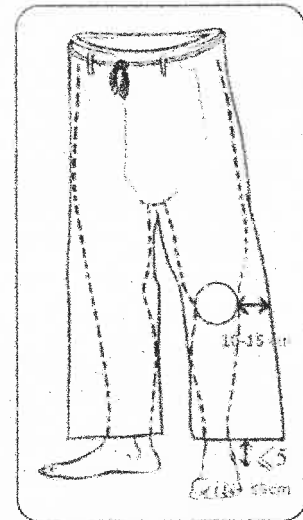
男女 73 kg級以上 (78・+78・-81・-90・-100・+100kg)

背中から 25 cm以上であることを確認。



- 5 下穿きの大きさを確認。

裾口からくるぶしの外側(足首)までの距離が 5cm またはそれ以下であるか、幅は膝の位置で 10~15cm に収まっているかを目視で確認。満たないと判断した場合は、測定器を用いて確認する。



- 6 女子選手の T シャツについては、次の通りとする。

- ① 色は白(透けない)、半そで、丸首とする。
- ② 製造業者マークは、最大 30c m<sup>2</sup> のサイズであれば認められる。柔道衣を着用した際に、製造業者マークが見えてはならない。
- ③ 所属名称もしくは、所属を表すエンブレムを左胸に固定してつけることは認められる。大きさは最大 100c m<sup>2</sup> とする。
- ④ いかなる商業的なマーケティングもつけてはならない。

- 7 その他

- ① 規程に満たない場合、短時間に着替えるよう命じなければならない。それでも満たない場合は出場を認めない。原則として、主催者は予備の柔道衣を準備しない。
- ② 手足の爪は短く切っており、試合者の個人的衛生状態がよく保たれていること。
- ③ 長い髪は試合相手の迷惑にならないよう束ねてあること。
- ④ マウスピースの着装については、事前に審判員(試合場係員)へ申し出ることによって着ることができる。ただし、白もしくは透明なものに限る。
- ⑤ 下穿きの下に着けるスパッツ等の長さは、膝よりも短いことを原則とする。
- ⑥ 入れ墨については、事前に審判員(試合場係員)へ申し出たうえで、シャツやテープ等で隠すこととする。
- ⑦ 監督(指導者)の服装については、原則として審判員に準じたものとする。

関係各位

公益財団法人全日本柔道連盟  
審判委員会委員長 大迫明伸  
( 公 印 省 略 )

国際柔道連盟試合審判規程の解釈変更に伴う国内大会への適用について

2023 年 3 月 25 日に国際柔道連盟より審判規程の解釈変更が発表され、先般開催された 2023 年カタール・ドーハ世界柔道選手権大会でも適用されたことにより、日本国内でも早急に適用する必要があります。

本連盟主催大会では、2023 年 6 月 1 日よりこれを導入しますが、各主催団体におきましては、施行期間に猶予を設ける等、導入時期を検討して頂きますよう、お願いいたします。

記

1 変更された主な内容

① 技ありの判断基準について

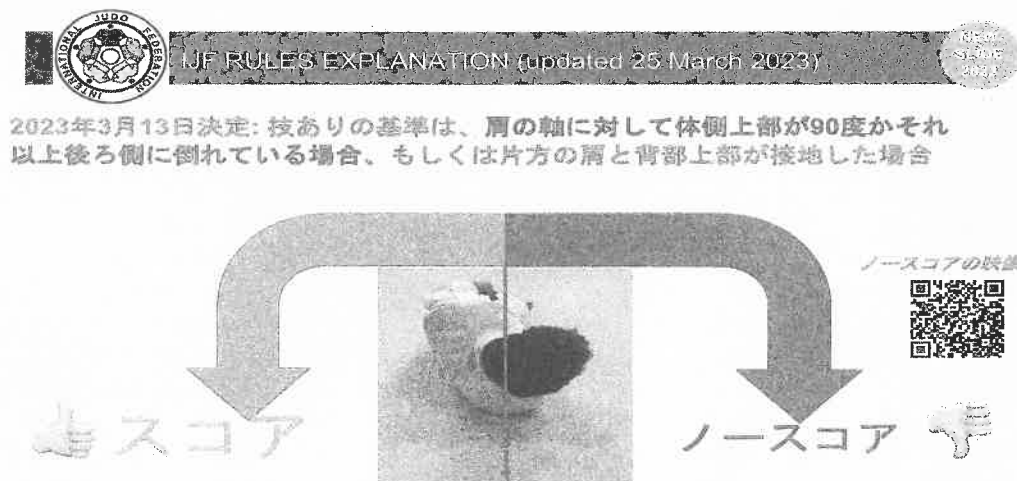
・ 変更前

技ありの基準は、**体側全体が 90 度以上背中側**、もしくは片方の肩と背中上部が接地した場合とする。  
**体側全体は、腰と肩のポジションをみること。**

・ 変更後

技ありの基準は、**肩の軸に対して体側上部が 90 度かそれ以上後ろ側に倒れている場合**、もしくは片方の肩と背部上部が接地した場合とする。

**体側上部は、肩のポジションのみをみること。(下記の国際柔道連盟資料参照)**



② GS時における「抑え込み」の扱いについて (IJF が世界選手権ドーハ大会後に発表)

・ 変更前

寝技において、「抑え込み」の場合、**選手自身が解かない限り 20 秒 (一本) まで継続される**。ただし、途中で抑え込まれている試合者が絞め技・関節技を施し、「参った」または「落ちた」場合、時間に関わらず逆転を認め、抑え込まれている試合者が勝利となる。

・ 変更後

寝技において、「抑え込み」の場合、**10 秒が経過した時点 (時計係はブザーを鳴らす) で「技あり、それまで」が宣告される**。※各大会においては、時計の設定および係員への周知をお願いいたします。ただし、時計の設定等の理由により運用できない場合は、上記に記載の通り施行期間に猶予を設ける等の対応をお願いします。

以上